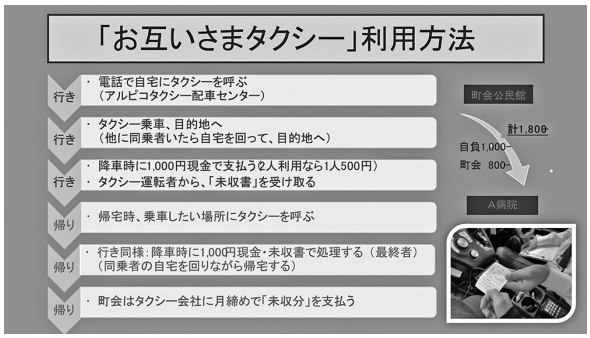
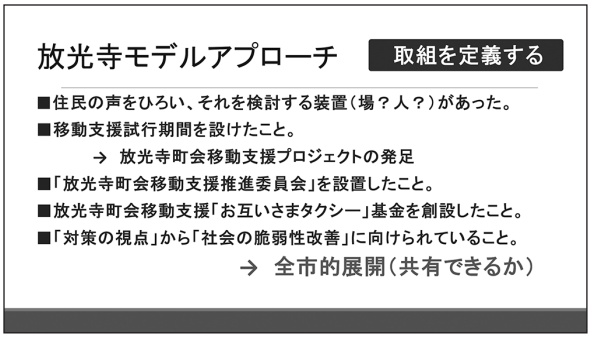
して全戸配布した。また、住民向け説明会を開催した。これまでの民生委員との関わりの中から50人のニーズ対象を把握しており、当面この層へのアプローチから積み重ねる戦略を立てることができた。商品性の観点から料金と利便性などの声を試行事業では主に拾う。2年間の取り組みを通じて、放光寺町会モデルを整理することができた。それを松本市全地区に「放光寺町会モデルアプローチ」として広め取り組みを定義するに至っている。





（4）成果の公表（活動発表・論文執筆等）

①2021年12月23日（木）　地域の移動支援に関する学習会を企画、約60人の参加を得て開催した。そこで、放光寺町会に加え、島内地区の地域主導型公共交通事業補助金を活用した島内川東乗合タクシーと島立買い物乗合タクシーについても事前調査し、この席上にて素材提供を行った。

②2022年2月28日（月）　松本市高齢者支援／地区生活支援員のための松本市白板地区放光寺町会「お互いさまタクシー」事業分析を令和3年度松本市地区生活支援員研修にて行った。

3．地域資源の発掘と活用を通した地域づくりの推進

総合経営学部観光ホスピタリティ学科　畑井　治文

（1）活動計画

本事業は、学生が参加し松本の田川地区・中央地区を対象として、「ひと」「もの」「こと」といった地域資源の発掘を行い、それらを活かしたまちづくりに取り組むものである。これまで観光ホスピタリティ学科では、田川地区および中央地区の地域づくりに取り組んできた。例えば、松本市田川地区では、松林邸のケヤキの保存活動に取り組み、けやき祭りやけやきっ子寺子屋などを実施してきた。この松林邸のケヤキは渚の地盤の地固めや松本城の築城・改築を見越して植えられた重要な地域資源と考えられる。2020年度はコロナの感染防止の観点から活動が制約されたが、田川地区ではケヤキを地域資源として活用した「子どもを中心とした地域づくりの活動」を

行った一方で、上土ではコロナの感染防止に対応しながら「歴史的景観を活用した情報発信の活動」を実施し、計画の一部変更はあったものの、当初の目的は達成した。

2021年度は、地域の中に埋もれた「ひと」「もの」「こと」を掘り起こし、地域の歴史的・文化的遺産の保存・活用をすすめる地域づくりに取り組み、特に2020年度に実施できなかった事業を含め、以下のような事業を進めることとする。

①松本市田川地区渚のケヤキをめぐる歴史を掘り起こし、駅を中心とした西側の地区において着地型観光の地域資源として活用する。

②上土商店街と連携して、松本市中央地区の歴史的資源（松商学園と上土との関わりなど）を掘り起こし、松本らしさを感じられる地域資源の発掘をこころみるとともに、地域の文化資源である松本電気館の保存・活用をすすめる。

③地域資源を活かした先進事例への視察研修を実施する。

④掘り起こされた地域の魅力を広くPRしていくために、チラシやパンフレットを作成するとともに、SNS等を活用しながら情報発信をする。

（2）活動内容

2021年度は、当初計画に掲げた事業のうちコロナ感染の広がりによって、松本市田川地区渚のケヤキの活用および視察研修が計画通りに実施できなかったものの、松本市中央地区の歴史的資源の掘り起こしや松本電気館の保存・活用については顕著な進捗があった。2021年度の取り組みは以下のとおりである。

①松本市田川地区渚のケヤキをめぐる歴史を掘り起こし、駅を中心とした西側の地区において着地型観光の地域資源として活用するという取り組みについては、コロナ禍によって大きな制約があったため、田川小学校の総合学習（けやきをテーマにした落ち葉拾いなどの学習）への支援を行うにとどまった。

②上土商店街と連携した松本市中央地区の歴史的資源の掘り起こしについては、教員・学生が参画した中央地区の「地域づくりワークショップ」において、まちづくりに活かすべき資源の洗い出しを行った。また、歴史的資源は単に歴史的な建造物などだけでなく、その資源を守り活かす地域の人々の取り組みも含めて価値を持つという視点から、まちづくりをこれまで中心的に担ってきた上土商店街振興組合と連携して、上土のまちづくりについての歴史振り返りの調査と50周年事業の実施を行った。

③上土大正ロマンのまちづくり協議会が2021年11月から松本電気館を借り上げ、前面を公開し街の景観が飛躍的に改善された。その結果、2022年2月に開催された「松本建築芸術祭」において主催者からその歴史的価値を高く評価され、芸術祭のメイン会場のひとつとなった。芸術祭の20日間の会期中に6万人の来場があり、マスメディアにも大きく取り上げられ松本電気館の知名度が大きくあがった。また2021年度に上土において「太陽とボレロ」「流浪の月」の2本の映画のロケが行われ、大正の景観を残す街として全国に知られることとなった。これを受けて2022年2月から3月にかけて電気館をテーマにした学習会を開催し、今後のさらなる活用を検討した。

松本電気館（右は松本建築芸術祭における松本電気館）

④地域資源を活かした先進事例への視察研修は、コロナ禍のために中止し、翌年以降の視察研修の情報収集を行った。
⑤掘り起こされた地域の魅力のPRとして畑井ゼミによるインスタグラムでの上土の風景の発信「上土Photo」や「白鳥写真館」のショーケースを使用した大正ロマンに関するディスプレイ、建築芸術祭の参加者に向けたSNSによる案内動画の制作などが行われた。また上土の魅力をアピールする媒体として街路灯に掲げる「商店街フラッグ」を白戸ゼミの学生と地域住民が連携して作成した。

インスタグラムによる情報発信

上土フラッグ

白鳥写真館のショーケースのディスプレイ

(3)活動の成果

2021年度は学生が地域とともに長年取り組んできたまちづくりの活動が大きな成果に結びついた年であった。例えば畑井ゼミが取り組んできた「白鳥写真館」のショーケースのディスプレイによって、所有者の著名な写真家である白鳥真太郎氏が触発され、今後2か月に一度松本に帰省し自らの作品を展示する取り組みが開始されることとなった。また10年近く視察研修や学習会、学生による調査研究、シンポジウムの開催などを行ってきた松本電気館については、所有者がその実績を認め建物の賃貸を認めたことから電気館の活用が可能となった。「松本建築芸術祭」での活用をきっかけに内部の清掃などの整備が行われ、今後まちづくりの拠点としてますます活用されることが期待できる。10年に亘る地道で継続的なまちづくりの取り組みが新しい局面に入った。さらにこのことにより地域住民のまちづくりに対する意識がさらに高まったとともに、学生も活動への大きな動機づけとなった。

(5)成果の公表(活動発表・論文執筆等)

・上土商店街振興組合50周年記念事業におけるこれまでの地域と大学が連携したまちづくりに関する学生による発表と教員による報告
・インスタグラム等での活動の発信およびマスコミを通じた活動の周知
・上土における歴史まちづくりに関する研究(論文等の執筆を予定)

---

4. 地域住民を講師とした「地域づくり学習会」の実施
～持続可能な地域に向けた継承・発展～

総合経営学部観光ホスピタリティ学科　向井　健

(1)活動計画

現在、人口減少社会へと突入する中で、地域の担い手が不足しており、如何に「持続可能な地域」を作っていくかということは、極めて重要な課題となっている。高齢化する地域の中で、コミュニティをどのように維持、再生していくのかが大きな課題である。それは観光ホスピタリティ学科として地域づくり活動に取り組んできた上土町、巾上西においても同様であり、地域リーダーも高齢化していく中で、どのように地域づくりの継承とそれらの活動の発展に向けた展望を描き出していくことができるのかということが課題になっている。そうした現状を踏まえ、本地域連携活動では、以下の点について取り組んでいくこととしたい。

①まちづくり学習会の開催

これまでの地域に蓄積されてきている住民の知恵を、世代間継承をしつつ、地域の担い手を育てることを目的として、学生と地域の住民・関係者がともに学習を行い、今後のまちづくりの実践につなげていく『まちづくり学習会』を連続講座として開催(全6回、10名を予定)する。

この「まちづくり学習会」の講師には、これまで地域づくりに尽力をされてきた住民を講師として招き、学生のほか、地域の若い世代にも声をかけて参加していただくことによって、これからの地域づくりの継承と展望をしていくことに寄与できるのではないかと考える。

2020年度はコロナ禍により計画していた事業が難しく遠隔による講座の実施を行う予定であった(2021年1月以降に実施予定)が、本計画はコロナの終息を前提として2021年度に予定していた事業を実施するものである。

②まちづくりの先進事例地への視察の実施

上記の①における「まちづくり学習会」において見出された課題を探究していくことを目的として、先進地視察を行う。視察には学生のほか、「まちづくり学習会」の講師をされた住民や地域の若い世代にも声をかけ合同で実施する。視察時期は、2022年2月頃を予定しており、視察先としては都市におけるコミュニティの再生に取り組む「シブヤ大学」などが候補である。

③まちづくりリーフレットの作成

上記の①における「まちづくり学習会」において